

# 幼児の身体表現に関する学生の意識と実践についての一考察

弓 削 田 綾 乃

## 要約

身体表現には、身体運動への気づき、自己の表出、他者との双方向のコミュニケーションなど、様々な利点がある。幼児期の身体表現の重要性が指摘されるものの、体系化された指導法が広く実施されているわけではない。筆者は、将来保育に携わる可能性が高い保育者養成課程の学生に、幼児の体育活動の一環として「表現遊び」を実施しているが、彼らは身体表現について、どのような印象を抱いているのだろうか。本学で担当している「体育実技」の受講者を対象におこなった事前アンケート、実技、感想を分析し、身体表現に対する学生の実態を探った。その結果、学生自身の身体表現の経験が不十分であるがゆえに不安を抱きつつも、幼児に体験させる意義を認識し、自ら指導できるようにになりたいという意欲を持っていることが判明した。本稿を通して、保育者自身に対する身体表現体験の必要性について論じたい。

キーワード 幼児の身体表現、学生の意識調査、保育者の体験

## 目次

1. はじめに
2. 幼児の身体表現への意識調査
  - 2.1 調査方法
  - 2.2 結果と考察
3. 「表現遊び」の実践
  - 3.1 実践内容
  - 3.2 学生の反応と感想
4. 意識調査と実践による総合的見地
5. おわりに

## 1. はじめに

保育内容の5領域の一つである幼児期の「表現」は、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現力を養い、創造性を豊かにするものとして設定されている<sup>[1]</sup>。その中で、身体を用いて感情やイメージなどを表出する「身体表現<sup>[2]</sup>」について、吉川は、「自分の身体や動きに気づく」「言葉で整理されない感情や感覚を、自分の身体と心のつながりの中に見出す」「自分と相手の気持ちを共有する」「他者との間に言葉を超

えた理解や共感を築く」などの利点をあげており、こうした体験が、さらに豊かな感性や表現力を養うとしている<sup>[3]</sup>。

身体表現に付随する律動的運動が、身体あるいは動きに意識を向けさせ、身体感覚・能力を高めることは言うまでもないだろう。何よりも日常生活ではなかなか味わえない、律動的でのびのびとした全身運動は、身体運動そのものを楽しむ充実感・達成感をもたらす。

しかし他の体育活動と大きく異なるのは、表現者の情緒が深く関わる点であろう。これについて、舞踊教育学者のドゥブラーは、身体表現とは情緒的性質と知的・身体的性質との統合体であると指摘し<sup>[4]</sup>、現在もこの考えが支持されている。それゆえに、身体表現は自己表出の手段としても注目される。日本の舞踊教育の先駆者である松本は、自己表出と美的創造の遊びが表現の最も大きな特性とした上で、「遊びの中で、空想の世界を発展させ、創作活動がさかんになる幼児期に、このような動きの表現の特性を生かして、心身の教育をおこなうことは意義深く、このような経験の中で、小さい心身は、自己を自由に開放し、拡大し、新しい外の世界への探究心を育てて豊かに発達していくものであろう」と述べている<sup>[5]</sup>。身体表現によって、バランスのとれた情緒的・知的・身体的成長が期待できることがわかるだろう。

一方、他者とのコミュニケーション機能については、身体表現がダンスと置き換えられることがしばしばあることを鑑みて、ダンスのノンバーバル・コミュニケーションという側面からとらえることができる。たとえば、ダンスは身体レベルで直接相手の心に感應し、自己を他者に伝達する機能が指摘されてきた<sup>[6]</sup>。こうした人間本来の原初的コミュニケーションを、石黒が「感染」と言い表わしたように<sup>[7]</sup>、「今この瞬間」の時空間を共有する者の身体間で、双方向に何らかの影響を及ぼしあっているのである。

こうした利点に着目し、幼児の身体表現教育を実践してきた舞踊教育者ならびに保育者は数多い。しかしながら、各時代に則した保育モデルが提示されてきたものの、体系的な指導法は、現在も模索中という現状がある。これは、何が原因なのだろうか。吉川が、保育者が環境を整え、自らも環境の一部となって適切な援助を行うことの重要性を訴えるように<sup>[8]</sup>、保育者自身の身体表現への関心と意欲、そして理論的知識と指導力のいずれもが不可欠であるにも関わらず、それらを十分に醸成する機会が少ないことが一因なのではないかと考えられる。

以上の問題意識のもと、本研究では、将来保育に携わる可能性の高い保育者養成課程の大学生が、身体表現に対してどのような意識をもっているかを調査した。具体的には、筆者が担当している「体育実技」の授業において事前にアンケートをとり、身体表現に抱いている観念的イメージや、経験の有無と印象、そして指導者としての意欲と自信等を探った。その後、幼児向けの「表現遊び」を実際に体験させ、その感想を分析した。本稿を通して、保育者自身に対する身体表現教育の必要性について論じたい。

この科目は、浦和大学こども学科1年生の必修科目であり、内容は、幼児の体育活動の理解と実践である。具体的には、ボール、フープ、縄、跳び箱、平均台等の器具を用いた運動

や、リズム体操、身体表現等を体験し、幼児期の発育発達に則した運動遊びの指導法を理解することを大きなねらいとしている。基本的に、各運動種目は、1コマ完結の形式で進めた。

身体表現に関するアンケートを実施したのは、半期15回のうち8回目の授業においてであり、その後11回目に「表現遊び」を実施した。おもな内容は、「リズムカルなまねっこ遊び」「新聞紙を用いた表現遊び」「易しい即興表現」である（3.1を参照）。

## 2. 幼児の身体表現への意識調査

### 2.1 調査方法

2008年11月24日、「体育実技」の授業時に、受講学生（1年生・全履修者数94名）を対象としたアンケートを実施した。アンケートの回答者数は82名で、設問は以下の通りである。なお、同じ用紙に、「こどもの体力低下」をテーマにした時事問題を提示し、感想・意見を書かせる課題を課したため、記名式にしたが、下記設問に関しては、「授業評価に関係ない」旨を明記し、口頭でも伝えて各自の正直な考えを記すように促した。

<設問>「表現遊び」に関連した質問です。

- ① 幼児教育における「表現」として、どのような内容・分野が思い浮かびますか？（自由記述）
- ② 「身体表現」という言葉を聞いたことがありますか？（はい・いいえ）
- ③ これまで「身体表現」をテーマにした授業（体育の内容の一部でもよい）を受けたことがありますか？（はい・いいえ）
- ④ ③で「はい」の人：どのような印象が残りましたか？（複数選択可）  
（楽しい・有意義・新鮮・難しい・つまらない・無意味）
- ⑤ 心に感じたことや思ったことなどを、身体の動きで表わすことが「身体表現」で、こどもの感性を豊かにします。あなたは、子どもたちに「身体表現（表現遊び）」を体験させたいと思いますか？（はい⇒⑥⑦へ・いいえ⇒⑧へ）
- ⑥ ⑤で「はい」の人：あなた自身が、子どもたちに指導できると思いますか？（はい・いいえ）
- ⑦ ⑤で「はい」の人：指導できるようになりたいですか？（はい・いいえ）
- ⑧ ⑤で「いいえ」の人：その理由は何ですか？（自由記述）
- ⑨ 「身体表現（表現遊び）」について、思っていることがあれば自由に書いてください。（自由記述）

### 2.2 結果と考察

まず、「①幼児教育における「表現」として、どのような内容・分野が思い浮かびますか？」という設問については、自由記述の回答を図1のような各キーワードで分類し、集計した。その結果、<ダンスに関する記述>が最も多く（27）、次いで<図画工作に関する記

述> (17)、<体育活動に関する記述> (14) があげられた。それ以外には、<体操> (8)、運動会やお遊戯会などの<イベント> (5)、<音楽> (4)、<ごっこあそび> (4)、<演劇> (2)、<言語> (2)、<保育の5領域>の一つ (1) となった。<その他> (16) には、「自己表現」「感情表現」「体を使って表わすこと」「笑顔が大切」「正解がない」といった、「表現」という言葉を説明する内容の記述がみられた。

この結果について、学生には「体育実技」という授業が念頭にあり、「身体を用いた表現」をまず思い浮かべたため、「ダンス」関連の記述が多数を占めたのではないと思われる。と同時に、ダンスを表現としてとらえていることがわかる。幼児の身体表現とは、たとえば運動会のダンス種目のような、必ずしもリズムにのった軽快なダンスのみではない。そうしたリズムカルで決められた振りを楽しむダンスだけでなく、動きの型が決まっていない模倣あるいはイメージや自身の感情などを動きで表出する表現等が含まれることを考えると、学生が抱いている「ダンス」とは何かを探る必要があったと思われる。

また、「ダンス、絵画、工作、歌」のように、いくつかの分野を並列する回答が多く、多様な分野での表現が存在するという認識があることがうかがえた。

「②「身体表現」という言葉を聞いたことがありますか？」という設問に対しては、「はい」が51%、「いいえ」が49%で、それぞれおよそ半分に分かれた(図2)。これによって、本授業を履修する学生の約半数が、「身体表現」という言葉を初めて耳にしたことが判明した。設問①の結果からは、ダンス＝表現の分野という認識が強いと読み取れたが、それが「身体表現」という言葉に変わると、なじみが薄くなると考えられる。

「③これまで「身体表現」をテーマにした授業(体育の内容の一部でもよい)を受けたことがありますか？」という設問に対しては、「はい」が44%、「いいえ」が50%という結果になった(残りの6%は無回答)(図3)。この結果により、約半数は「身体表現」を体験してきたことがわかる。残りの約半数は、ダンス等の授業を受けてこなかったか、設問②で「身体表現」という言葉を初めて聞いた学生が約半数だったことから、たとえダンスなどの授業を受けていたとしても、「身体表現」という意識を持たなかった可能性が考えられる。

「身体表現」の授業を受けた経験がある学生の印象(設問④)としては、選択率が高い順に、「楽しい」42%、「新鮮」25%、「難しい」18%、「有意義」14%、「つまらない」1%、「無意味」0%という結果になった(図4)。約2～4割が「楽しい」「新鮮」を選んだ理由について、設問では問わなかったが、どちらかという肯定的体験として残っていることが判明した。しかし、約2割の経験者が「難しい」と感じたことも事実で、授業で身体表現を展開する困難さがうかがえる。

次に、身体表現の説明として、「心に感じたことや思ったことなどを、身体の動きで表わすことが「身体表現」で、こどもの感性を豊かにします。」という記述を読ませた上で、「⑤あなたは、こどもたちに「身体表現(表現遊び)」を体験させたいと思いますか？」という質問を投げかけたところ、「はい」(88%)が圧倒的に多く、「いいえ」は0%であった(無回答が12%)(図5)。これによって、身体表現をすでに体験的に理解している者も、そうでな

い者も、こどもに体験させることへの意義・必要性を感じていることが判明した。

「こどもたちに身体表現を体験させたい」と答えた学生に、「⑥あなた自身が、こどもたちに指導できると思いますか?」と問いかけたところ、「はい」が49%、「いいえ」が46%とほぼ二分する結果になった(図6)。これは、幼児向けの身体表現の授業を実際に受ける以前の回答であり、この段階で、それなりに自信を持つ学生が多いことは、意欲的な姿勢のあらわれではないかと推測する。また、この設問に関して、「いいえ」の理由と判断される自由記述を設問⑨から抽出すると、「まだ知識がないから」「指示がでできるか不安」「自信がない」といったものがあった。「いいえ」と答えた学生も、知識不足で自信はないが、設問⑤の結果とも合わせると、学びたいという意欲はもっていると判断される。

さらに、「⑦指導できるようになりたいですか?」については、「はい」が93%と高率であり、関心の高さがうかがえる(図7)。それ以外には、無回答と「どちらでもない」が合わせて6%で、残りの1%が「いいえ」を選んだ。「いいえ」を選んだのは、人数でいえば1人のみであったが、その理由として「難しいし、どう指導すればいいかわからないから」と記している。これは逆にいえば、適切な指導法を身につけられれば「はい」に転じる可能性を示唆しているととらえられる。

最後の、「⑨「身体表現(表現遊び)」について、思っていることがあれば自由に書いてください。(自由記述)」の設問では、自由記述の内容を図8に示すように分類したところ、＜感性・想像力・個性に関する記述＞が21と最も多く、＜不安に関する記述＞が15、＜楽しさに関する記述＞が10、＜コミュニケーション能力に関する記述＞が9、＜保育者像に関する記述＞が6と続き、＜その他＞が11という結果になった。それぞれの項目について分析すると、以下ようになる(＜その他＞は省略)。

#### ＜感性・想像力・個性に関する記述＞

学生からは、「小さい頃に身体表現を経験すると、心の豊かさ、想像力が鍛えられる」「心を感じたことや思ったことを身体の動きで表わすことで心が豊かな子が育つ」といった、心の豊かさ、すなわち感性を育む効果を期待する様子がうかがえた。また、「一人一人が違う表現をする」「その子らしい個性が出てくる」といった、個性の表出、すなわち自己表現につながると考える記述もみられた。そして、「答えがない表現方法」「固定観念がないほうが自由な表現が生まれる」という、幼児期ならではの柔軟性に適応した分野である点についての指摘もあった。

#### ＜不安に関する記述＞

次いで多く聞かれたのが、不安を訴える声である。特に他の運動遊びのように、ルールがない、あるいは勝敗がつかないといったことに対して、「“決まりがない自由なこと”ほど難しいものはない」という印象を持っていることがわかった。

また、「こどもたちに教えてあげたいと思うけれど、難しい気がする」というように、他の運動遊びに比べて、自分自身の体験があまりにも未熟であることへの不安もあげられていた。それ以外にも、「少しでも恥ずかしいという気持ちがあるとできない分野」「自分の体を

使って表現するので、一つ一つの動きなどが難しいと思う」という、恥ずかしさや、身体の動かし方に対する不安、苦手意識がうかがえた。身体表現とは、いまだに指導者の裁量に負うことが大きいという点が、足かせになっているのだろうと考えられる。

#### <楽しさに関する記述>

楽しさについては、「いろいろなものを使って体を動かして、みんなで楽しい時間を過ごせる」「身体表現はとても楽しい気分になれる」といった、自分自身の経験から述べる内容が目立った。この設問での楽しさに関する記述数は多くないが、これまで身体表現の授業を受けた際の印象を問う設問④では、約4割が「楽しい」と答えており(図4)、身体表現に対して比較的肯定的な印象を抱いていることがうかがえる。

#### <コミュニケーション能力に関する記述>

この項目については、まず、子ども自身のコミュニケーション能力を高める機能に注目した記述があげられる。たとえば、「言葉でうまく伝えられない子どもでも、全身をフルに使って伝えられる」「自分の意思を相手に上手に伝える方法がわかる」「自分はこういう人間だ」と周りの人にわかってもらう手段の一つ」といった記述である。

また、「友達とコミュニケーションがとれるので、仲良くなるきっかけになる」といった、子ども同士の協調性によいと考える考えもみられた。

さらに、保育者自身が、「身体表現ができるようになれば、子どもとコミュニケーションをとりやすくなる」と期待する声もあった。いずれにしろ、自己表出が、コミュニケーション能力とも密接に関わっていると、すでに認識している学生がいることがわかる。

#### <保育者像に関する記述>

最後に、学生自身が「こうなりたい」と希望する記述があげられる。それらはすべて、「表現」が苦手な子どもに指導できるようになりたい」「話を聞かない子ども達を引き付けるために身体表現を指導できるようになりたい」などの、意欲的な姿勢であった。難しい分野だと認識しながらも、幼児期に体験させることの重要性を感じ、よき指導者となれるよう努力したいという思いのあらわれだと理解できよう。

### 3. 「表現遊び」の実践

#### 3.1 実践内容

次に、「体育実技」の一環として、実際に「表現遊び」を体験した学生の反応と感想とをあげていきたい。なお、学生の反応については筆者自身の観察によるものであり、感想については、毎時間提出させている「授業ノート」の自由記述を分析したものである。「授業ノート」とは、授業で実施した内容に加えて、幼児の発育発達との兼ね合いや指導の注意点などを併記した配布資料であり、実技後、空欄を埋めさせながら授業のポイントを振り返ると同時に、運動遊びの参考資料として活用してもらいたいとのねらいのもと、筆者が作成したものである。そうした「授業ノート」の最後に自由記述欄をもうけ、学生の感想や質問等を書かせている。

2008年12月22日に「表現遊び」をテーマにした授業を以下の内容で実施した。

- ①「表現遊び」「身体表現」についての説明と、映像鑑賞
- ②物を使わないまねっこ遊び
  - ・リズム太鼓や軽快な音楽に合わせて、リズムカルに動こう  
(スキップ、ツーステップ、歩いて転がる、膝歩き等)
  - ・動物や乗り物になってみよう
- ③物を使ったまねっこ遊び
  - ・新聞紙を使っていろいろな形・動きをまねしてみよう  
(広げる、折る、筒状、丸める、投げる、転がす、ちぎる等)
- ④易しい即興表現
  - ・詩のイメージを、身体で表現してみよう  
金子みすずの詩「大漁」  
(教師によるお手本 → 各自創作 → 一斉に披露)
  - ・歌のイメージを、身体で表現してみよう  
童謡「チューリップ」  
(グループ創作 → 数グループずつ披露)
- ⑤授業ノートの作成、「表現遊び」に関する理論的補足

### 3.2 学生の反応と感想

上記の流れにおける学生の反応としては、「表現遊び」に関して事前に口頭と映像による説明をした上での実施であったものの、全体的にとまどいや恥ずかしさが見てとれた。

②の「物を使わないまねっこ遊び」は、音に合わせてリズムカルに動く、いわば表現遊びの導入部分であり、慣れた動きの繰り返しだったからか、徐々に学生も楽しんでいる様子だった。また、③の「物を使ったまねっこ遊び」では、身近な物として新聞紙をとり上げ、あまり大きな動きを伴わずにできたため、戸惑いは少なく、一つの形・動きに対して様々な表現を学生側から引き出した。

しかし、④の「易しい即興表現」では、詩にしろ童謡にしろ、言葉や音楽のイメージを、感じたまま身体で表出するという行為に、とまどう学生が多かった。これまで「身体での即興表現」の経験が少なくて発想が生まれなのか、イメージを持っていても身体がついていけないのか、恥ずかしさが先行するのか、いずれにしてもごちなさが目立った。

しかしながら、初めてにしては、積極的に取り組めたのではないだろうか。特に、金子みすずの詩「大漁」では、まず筆者自身がお手本を見せたが、これは言葉のイメージを汲んだ抽象的な身体表現であった。それに対して学生の表現には、「いわし」「祭り」「海」「とむらい」といった言葉を具体的に示すような動きが見られた(たとえば「いわし」を、掌を合わせて胸の前でヒラヒラ動かして魚を表わすような動き方)。

また、詩を各自で即興表現させた時よりも、童謡を歌いながらグループごとに即興表現させた時の方が、動き自体にまとまりがあり、のびのびと表現されているように感じた。

その後、「授業ノート」に書かれた学生の感想を読むと、即興表現の「難しさ」をあげたものが最も多かった。「これほど難しいと思わなかった」「頭で考えてしまい、すぐにはイメージがわかなかった」「恥ずかしかった」など、これまで授業で実施してきた幼児の運動遊び（ボールや縄など）とは別の発想、技能が必要なことに、ショックを受けた様子が読み取れた。

その反面、「皆で表現するのは楽しい」「何も気にせずにやると、とても楽しむことができる」という、活動を楽しむ声や、「頭より身体で動くこともたちに向いている」「こどもの感性を伸ばしてあげられる」「こどもの内面が見えたり個性が出たりして面白い」といった、幼児期ならではの利点に目を向ける感想も多くみられた。そして、学生自身、「もっと頭をやわらかくしたい」「表現力を身につけたい」「感性を豊かにして、こどもと一緒に表現を楽しめるようにしたい」「日常生活の中でイメージ力を伸ばして、こどもの感性に近づきたい」「身近なものですぐできるようになるよう経験をつんでいきたい」といった、前向きな意欲を示す意見が目立った。

以上のような「表現遊び」は、今回1回で完結したが、数回にわたって実施すれば、「難しい」「恥ずかしい」という思いを乗り越え、自己を解放して動きや表出を楽しむ姿、ならびに学生自身の個性を引き出せたかもしれないが、時間の制約上できなかった。しかし、この授業に続いて3回にわたり、「アンパンマン体操」という既存のリズム体操の曲に、グループごとに独自の振り付けを考えて発表するという課題を出したところ、各グループが設定した主題にあった動きの工夫がみられ、「のびのびと動けるようになった」「イメージを自由に身体で表現する楽しさを知った」「協力して表現を考え、発表する喜びをこどもたちにも伝えたい」など、充足感を伝える感想が多かったことを付記しておきたい。

#### 4. 意識調査と実践による総合的見地

身体表現に関する事前のアンケートでは、身体表現＝ダンス、楽しい分野、幼児期には必要だなどと考える学生が多かった。しかし同時に、「難しい」という印象も強く、実際の体験後も前向きな意欲は持ちつつ、苦手意識を抱いてしまいがちな傾向が読み取れた。

そうした原因の一つには、ルールやゲーム形式の有無、必要な技能、評価基準などで他の運動遊びと様相が異なる点、あるいは身体表現の知識・実践力が身につけていない点など、自身の経験の未熟さからくる不安があげられよう。また、大人になってからの身体表現は、頭で考え過ぎてしまったり、他人の目を気にしたりして、自分を解放できるまでに時間がかかるという要因も大きいだろう。実際に体験すると、必ずしもリズムカルに気持ちよく動くだけの分野ではなく、むしろ自己の表出という、内面に向き合わねばならない場面に直面して、難しさを感じた声が多かったと思われる。しかし、こうした難しさを実感するだけでも、身体表現の理解につながる一步を踏み出したのではないだろうか。また、難しさを実感する

ことで、幼児期に体験することの容易さ、大切さを再認識したことが、今回の調査で明らかになったと考える。

今回の結果は、学生自身の「身体表現」への思い、とりわけ不安感を浮き彫りにした。これは、幼児の表現遊びに思いをめぐらす以前の問題である。身体表現の喜びと難しさを実体験として持たなければ、幼児への指導は不可能と言っても過言ではない。したがって、まずは、これまでの身体表現の経験の中で、楽しいと感じた要因、その反対に難しいと感じた要因を精査し、より肯定的体験へとつなげるためのヒントを探る必要があるだろう。その上で、幼児の身体表現について知識を深め、自己を解放するために十分な時間と内容をかけて自身の感性を磨きながら、適切な指導法を学ぶのが理想だろう。

本調査で対象にした学生に関して言えば、実際に体験してその難しさを痛感しつつも、学習意欲を失わない姿は、今後、保育者として伸びる可能性が高いことを示唆していると思われる。いかにして彼らが身体表現を楽しみ自信をつけられるかが、将来子どもたちと豊かな身体表現を共有するための鍵になるだろう。「身体表現」について、走ったり器具を用いたりして運動能力や体力等を育む運動遊びと同等にとらえるのではなく、感性を伸ばし、自己表現力を高めるための一手段と認識し、その指導ができるように学生を養成していく必要があると考える。

今回、1回の実践で、学生らに身体表現の指導法を提示できたとは言えない。また即興は、頭で考えてから行動しがちな「大人」には厳しい課題だったかもしれない。しかし、アンケート調査の結果を踏まえ、身体表現の新しい側面を実感してもらうために、あえて即興表現を学生に体験させることにした。できることならば、今後もこうした自由な即興表現の経験を積み重ね、身体を通じて自己を解放し、他者とコミュニケーションすることの楽しさを実感してほしいと希望する。

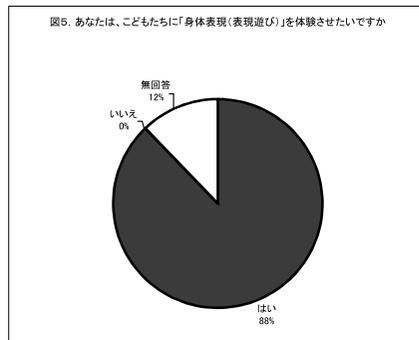
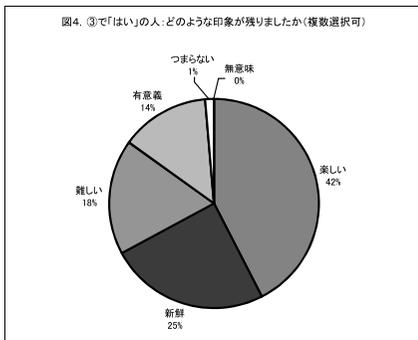
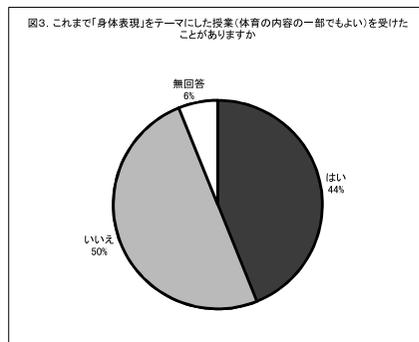
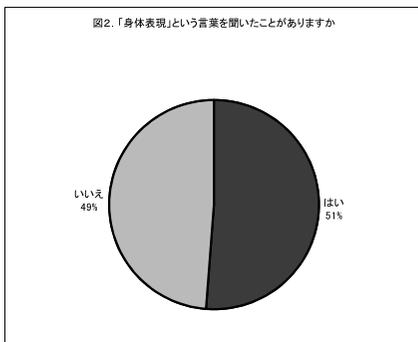
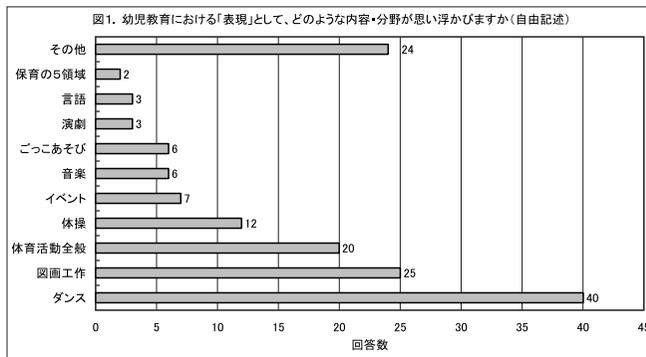
ところで、幼児期の身体表現を長年研究してきた西は、身体による双方向的なコミュニケーションの場には、他者の動きを自分に取り込みながら、同時に自らも同じ動きを送る共鳴動作が多く発現することを指摘し、この一体感が、より親密で豊かなコミュニケーションの世界へ発展するとした<sup>[9]</sup>。これは、感性が自分ひとりの世界では成り立たない、他者との開かれた関わりのなかから育まれるものだということを示唆する。身体と身体の双方向的な交流が重要だといえよう。身体表現は個人の感性を発揮できる場でありながら、同時にコミュニケーション機能に優れ、豊かな感性を育む場でもあることを、将来保育に携わる可能性が高い学生の多数が感じ取っていた。そして、体験に基づく新たな気づきによって、身体表現に対する意識が高まったことを明示できたと考える。保育者自身の豊かな身体表現の積み重ねが、こどもとの有意義な時空間を生み出す手がかりの一つになりうるといえるだろう。

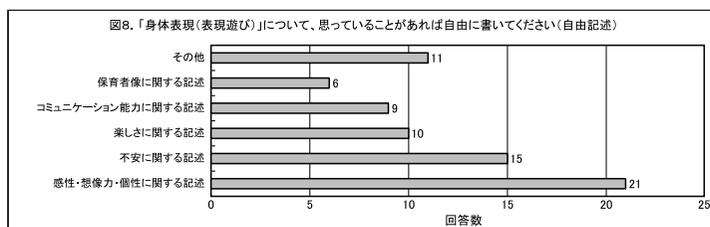
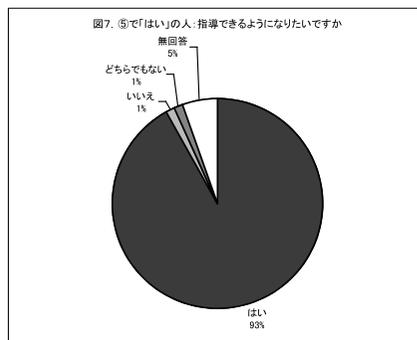
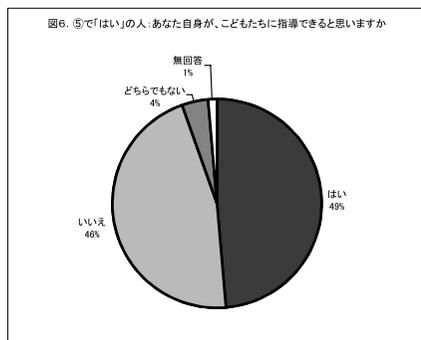
## 5. おわりに

幼児期の身体表現の指導法については、現在、舞踊教育者を中心に、体系化されつつある。特に年齢が進むにしたがって工夫された表現へ発展させることが望ましいという指摘<sup>[10]</sup>に

応えるためには、より体系的な方法を要する。それには保育者自身が適切な指導を受けることだけでなく、様々な身体表現に慣れ親しみ、気負わず楽しめる環境をつくるのが急務だろう。そのためには、保育内容の柱の1本としての「表現」に関して、実務に入る前の段階にある学生に対し、多角的な視点からアプローチしていくことが必要なのではないかと思われる。

今回のアンケート調査で、学生の身体表現への関心は決して低くないことが明らかになり、むしろ使命感を持っていると感じられた。身体表現の経験の未熟を認知し、実際の体験で難しさを実感しながらも、幼児にとって重要な分野だということを理解して、ともに楽しめるスキルを身につけたいという思いが読み取れたのだ。こうした思いに注目し、今後は苦手意識を払拭させるため、学生自身が楽しい体験となるような身体表現の実践と、指導するスキルを身につける内容との精査につとめ、授業展開につなげていきたい。





## 注

- [1] 文部科学省 ホームページ「幼稚園教育指導要領」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm)  
 厚生労働省 ホームページ「保育関係」  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku.html>
- [2] 身体表現は、文字通り「身体“の”表現」あるいは「身体“で”表現」ということを意味する。これについて本山は、その表現が意識することなく「あrawれ」たものであるか、意図的に「あrawし」たものであるかに区分し、すべての子どもの中には「まるごとのからだ」から発している言葉にできない思いがあり、結果重視の「あrawし」ではなく、その過程を大切に創作的活動が必要だと指摘している。  
 本山益子（西洋子他著）、『子ども・身体・表現』、市村出版、東京、p13-18、2003
- [3] 吉川京子（西洋子他著）、身体表現をとりまく問題、『子ども・身体・表現』、市村出版、東京、p125、2003
- [4] ドゥブラー .N.マーガレット（松本千代栄訳）、『舞踊学原論』、大修館書店、東京、p88-100、1974
- [5] 松本千代栄（舞踊文化と教育研究会編）、『松本千代栄撰集2人間発達と表現一幼・小期』、明治図書出版、東京、p144-145、2008
- [6] 頭川昭子（舞踊教育研究会編）、舞踊のコミュニケーション、『舞踊学講義』、大修館書店、東京、p107-109、1991 林信江（舞踊教育研究会編）、身体と動きと舞踊、『舞踊学講義』、大修館書店、東京、p79-80、1991等
- [7] 石黒節子、『イメージ・コミュニケーションとしての舞踊』、三一書房、東京、p13、1989
- [8] 前掲書3、p125
- [9] 西洋子（日本学会議文化人類学・民俗学研究連絡委員会編）、子どものからだの表現、『舞踊と身体表現』、財団法人日本学術協力財団、東京、p119-130、2005
- [10] 前掲書3、p145-146

## Summary

### A Study of the Student's Consciousness and Practice about the Children's Physical Expressions

Ayano Yugeta

Physical expressions give a person awareness of the movements, mind expressions, and communications with other people, and so on. Therefore, it is important to experience some physical expressions for the children. But, systematized methods haven't been established yet. I teach children's physical expressions for the students of the Child Studies, Urawa University, as one of the physical education. How do they think of physical expressions? I analyzed questionnaires about the physical expressions, exercises and descriptions of impressions, and researched student's consciousness and responses.

As that result, it found out the following. They have a few experiences of the physical expression, and they have some worries. But, they recognize the meaning that makes children experience it, and want to teach to them. This research shows the need of the empirical knowleges of the physical expressions for the nursery teachers.

**Keywords** Physical Expressions for Children, Student's Consciousness of the Child Studies, Empirical Knowlege of the Nursery Teacher

(2009年4月10日受領)